

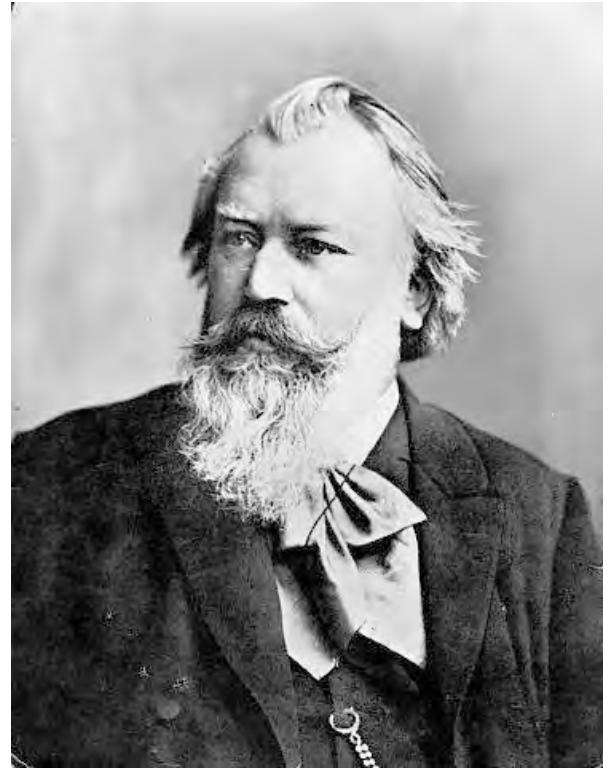
## 1. 大学祝典序曲 作品80(ブラームス)

ブラームス(Johannes Brahms: 1833 ~ 1897)は、ハンブルクで生まれた、ドイツの作曲家、ピアニストである。ブラームスのプロフィールについては、国分寺フィルの過去の演奏会における楽曲解説での記述に譲ることとして(当団のホームページでも公開中!)、さて、交響曲第2番(ニ長調、作品73)が初演されてから2年後の1879年、ブラームスはドイツ(現ポーランド)の Breslau 大学から名誉博士の称号を授与された。この『大学祝典序曲』は、その返礼として、4つの学生歌を引用しながら作曲されたものである。



© Jar.ciurus

ブレスラウ大学(旧称)現在はヴロツワフ大学  
中欧最古の高等教育機関のひとつとされる

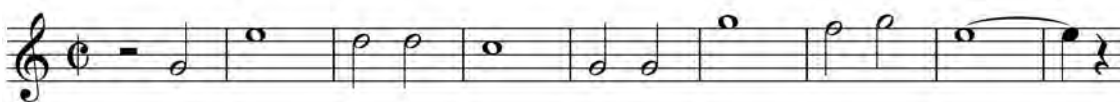


Johannes Brahms

曲の構成はソナタ形式に分類されるが、古典的な様式からは自由に発展させたものとなっている。  
提示部は序奏がなく、冒頭から第1ヴァイオリンが第一主題を奏でる。



弦楽器、ファゴット及びホルンによる讃美歌のような穏やかな曲想のあと、主題の確保が行われると、ティンパニの連打に導かれて、トランペットに副主題が現れる。



これが、引用された1つ目の学生歌「Wir hatten gebauet ein stattliches Haus.(我々は立派な家を建てた)」である。

ブラームスが1880年に『大学祝典序曲』を作曲したオーストリアの保養地バート・イシュル(Bad Ischl)。  
ハプスブルク家の夏の離宮もあるこの場所で、ブラームスは1891年にはクラリネット五重奏曲も書き上げている



その後、行進曲風な主題で始まる経過句(部)では第一主題を展開させている。

第二主題は、第2 ヴァイオリンで演奏される。



これは、学生歌「Der Landesvater(祖国の父)」から引用されたものである。

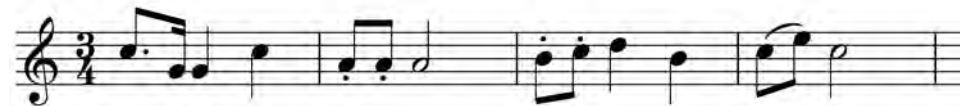
そして曲は提示部の結び(小結尾)に移行するが、ここでも新たな主題を提示している。



このファゴットで演奏される学生歌「Das Fuchslied(キツネの歌)」は、筆者のような昭和の時代に学生生活を送った者には、どうしても受験勉強が脳裏に蘇ってくる旋律である。

この旋律が全体に拡大されると、曲は短い展開部に移行する。

その後、ティンパニの弱音の連打に続けて第一主題が展開された形で現れる。ここからが形式上、再現部となる。その後、第二主題、小結尾主題の再現に続いて移行したコーダ(終結部)では、4つ目の学生歌「Gaudeamus igitur(愉快地にやろう!)」を堂々と歌い上げて全曲を閉じる。



なお、この曲には作曲者自身が編曲したピアノ連弾版があり、原曲よりも早く1880年9月13日に、ブラームス自身の演奏で初演された。この時の連弾の共演者は、その日に誕生日を迎えたクララ・シューマンであった。

クララ・シューマンは19世紀に活躍したピアニスト・作曲家。ブラームスが敬愛した師、作曲家ロベルト・シューマンの妻としても知られている。ブラームスとクララは友人として生涯にわたり親交を持ち続けた。図は旧100ドイツマルク札(部分)に描かれたクララ・シューマンの肖像。

